

英語教育における文化

Culture in English Education

長谷川 誠

Makoto HASEGAWA

0. はじめに

外国語を学習するときには、発音、語彙、文法を学ぶだけでなく、その文化も学ばなくてはいけない、という言葉は、よく耳にする言葉である。英語と文化と聞くと、多くの人が思い浮かべるのは、英国紳士、Big Ben、紅茶、あるいは、自由の女神、Disneyland、開拓精神などであろう。これらは、英語を母語とする、英米の文化である。

現在、英語を学ぶ目的は、と問われれば、世界中の人とコミュニケーションができるようにするため、という答えが圧倒的に多い。英米文化を学ぶため、というのは極少数でしかない。

世界共通のコミュニケーションの道具としての英語を学ぶ場合には、文化をどのように考えたらよいのであろうか。本論では、それをについて考察したい。

1. 文化とは

日常生活において、文化という語はどのように

使われているだろうか。日本の文化を外国人に説明するという状況で、話題になるようなものを拾い上げてみよう。建築、庭園、音楽、能、歌舞伎、日本舞踊、着物、折り紙、生け花、茶の湯、書道、絵画、陶磁器、日本人形、文学、和歌・俳句、仏教、禅、神道、キリスト教、神話、伝説、昔話などが話題として取り上げられることが多い。これらは、必ずしも伝統的な日本文化といわれるものに限られない。建築を例にすれば、法隆寺・伊勢神宮のような、長い歴史のある神社・仏閣ばかりではなく、近代的な高層ビルも取り上げられる。

しかし、文化という語が使われるのは、このような比較的形のはっきりした、対象として捕らえられるようなものに限らない。

広辞苑第5版では、「人間が自然に手を加えて形成してきた物心両面の成果。衣食住をはじめ技術・学問・芸術・道德・宗教・政治など生活形成の様式と内容とを含む。文明とほぼ同義に用いられることが多いが、西洋では人間の精神的な生活にかか

わるものを文化と呼び、技術的發展のニュアンスが強い文明と区別する」とあり、エンカルタ百科事典99では、「特定の時代や人々の集団がもつ、信仰、態度、言語などあらゆる生活の仕方。習慣や儀式、芸術作品、発明品、技術、伝統なども文化のうちである。この用語は、より特殊な美術的な定義をされることもあり、社会の知的・美的な業績をさすこともありうる」となっている。

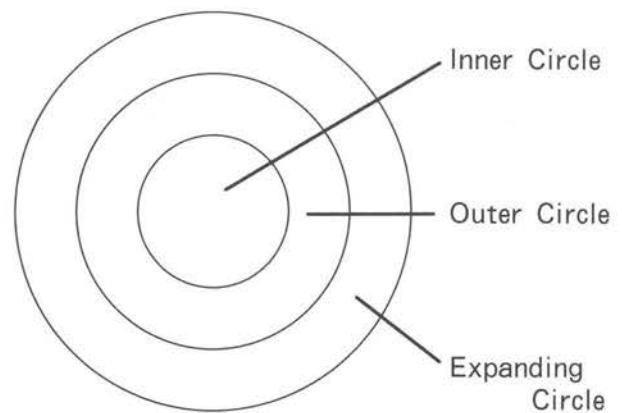
また、特定の文化の理解を目的とする文化人類学では、文化とは物質や人間の行動および精神的要素がからみあってひとつの体系としてできあがっているもの、という考えを基にし、慣習や儀礼などがそれぞれの社会の中で一定の役割をもつように、各文化要素は社会の統一に貢献している機能であると考え、必要性をといっている。また、各文化はそれぞれに固有な様式で組織された統合体であり、他の文化の基準をそのまま適用しても理解できない。文化の構造は価値体系が規定するととらえている。

以上のような定義を見てみると、その中には、最初にあげた日本文化という場合と同様に、形のあるものと、はっきりした形のないものが含まれていることがわかる。これらは、文明と文化のように区別することは難しい。たとえば、日本庭園には、その形状、配置などに、当時の世界観が同時に現れているからである。このように人間が作り上げたものには、それを作り上げた人間の価値観、文化が反映される、と考えられる。

通常、英語教育やコミュニケーション論では、文化というときには、「特定の時代や人々の集団がもつ、信仰、態度、言語などあらゆる生活の仕方」という意味で用いられている。大文字のCulture（伝統的芸術、文学など）と小文字のculture（生活文化）という分け方をすると、後者の使い方である。本稿でも特別な説明のない場合には、この意味で用いることとする。

2. 英語圏の広がり

英語という言語は、広く使用されるようになってきたが、それに接する立場の違いによって異なった側面を区別することが必要である。Braji B. Kachru (1986) は、英語を使用する国または民族社会を、同心円を描く3大グループの分布図として表すことができるとしている。



それは、内心円として一番内側にInner Circle、その外側にOuter Circle、さらにその外側にExpanding Circleの3つのグループを持つ。Inner Circleは、英語を母語として用いる国または民族社会を示し、具体的にはUSA, United Kingdom, Australia, Canada, New Zealandなどがこれに含まれる。歴史的には、United Kingdomが初期には中心となり、その後アメリカ大陸の発見と移住によってアメリカ合衆国（以下米国と呼ぶ）が誕生した。残りの3カ国は過去に大英帝国連邦の一部として、英国による植民地化の対象となっていた時期があった。米国は政治・経済的に独立はしたものの、多民族からなる移民社会で、独立の主導権を握ったのが英国からの移民であったため当初から英語社会が成立したと言えよう。

Outer Circleは、第2言語として英語が用いられる国および民族を示す。これには、Philippines, India, Singaporeなどが含まれる。このグループで英語が第2言語として用いられる様になった事情は同一ではない。その事情をいくつかあげると次のようなものがある。

- A. 国家・社会が、多民族・多言語からなる場合、民族・部族間の政治・経済上の抗争を避けるために、政治力、経済力、文化で優る国の言葉である英語を導入する。独立後も英語を必要としたIndiaの場合がこれに当てはまるであろう。
- B. 植民地化が行われた結果、諸民族の間のコ

コミュニケーションにおいて、英語が徐々に共通の言語として用いられるようになり、ついには、政府が公用語として定める言語よりも効力のあるものとなる。これは、英語が支配階級の求める高度な文化社会と密接に結びついた結果、政治・経済・教育・文化の分野で現地語よりも英語の方が優遇されることにより生じる。特に、学校教育で使用される言語が英語となると、優秀な人間とは英語のできる人間ということになり、英語の価値がますます高まる。Singaporeは、この良い例である。

C. 英語は浸透したが、現地語も平行して同じように使われる場合もある。Switzerlandがこれにあたる。

Expanding Circleには、Japan, Korea, China, Taiwan, Thaiなどが含まれる。このグループの特徴は、その社会では、自国語で用が足り、英語は学習されることはあっても、あくまでも外国語としてである、ということである。

このような3つのグループの英語を、その社会の文化との関係で見るとどうなるであろうか。Inner Circleの英語は、英国民および英国からの移民によって使用される言語であるので英語文化との結びつきがもっとも強く、「英米の人々に固有の、いわば彼らの私有財産とも言うべき英語」⁽¹⁾、つまり、「民族語」としての英語である⁽²⁾。

Outer Circleの英語は、母語としては他の言語を有しているが、さまざまな事情によって、自分の属する社会の中でコミュニケーションの道具として使用されている言語である。ここでは、植民地化された期間や、その政策などによって、英語文化の浸透の程度に違いはあろうが、英語文化との結びつきは、Inner Circleよりは弱く Expanding Circleよりは強いどこかあるところ、ということになる。Expanding Circleの英語は、外国語として学習される英語であるから、英語文化との結びつきは最も少ない。

Quirk (1985)⁽³⁾ は、英語人口について、英語を母語とするもの約3億、第二言語としての使用者約3億、外国語としての使用者約1億の総計約7億人であるとしている。しかし、David Crystal (1985)⁽⁴⁾ は、さらに細かい数字を挙げ、英語を母語とするもの約316,015,000、第二言語としての使用者約1,336,845,000、外国語としての使用者を含めた

総数は、10億から20億の間だとしている。

また、地域ではないが、インターネットの急速な発達に伴って、インターネット上での情報のやり取りが膨大な量となっているが、Buchanan (1997)⁽⁵⁾ は、WWWの90%以上が英語であると報告している。

このように英語の使用される範囲が拡大するとともに、英語は、民族語から国際語へと移行している。

3. 英語と英語教育

英語教育は、英語に対する姿勢・目的により時代とともに変化するものである。日本が近代化に踏み出した、明治時代の英語教育は文明開化のために存在した。明治のスローガンは文明開化と富国強兵であった。日本が独立を維持するためには、ヨーロッパの先進文明を吸収し、ヨーロッパと肩を並べるだけの国力を持たなければならなかった。英語教育もこの目的のために行なわれた。当時の世界第一等の強国はイギリスであった。そこで英語は、主として欧米の進んだ科学知識や産業技術、政治・経済制度などの導入を目的として、当時のエリートたちによって学ばれた。この当時の英語教育では、英語学習の目的が、もっぱら専門書を読んでそこから知識を吸収することであったので、文法、語彙を学び正確に読み取るだけの文法力をつけることが中心であった。

第二次大戦後は、英本国の威光にかけりが出て、それまでの植民地の多くが独立したが、同じ英語を母語とするアメリカ合衆国が軍事・経済面で強大化し、世界の政治・経済・文化などの各方面で指導的役割を果たすようになった。それにつれて、英語から米語へと重心の移動はあったものの、この当時の日本人学習者の目標とする英語は、イギリスおよびアメリカの「民族英語」⁽¹⁾ としての英語(米語)である。このころも、異文化コミュニケーションということは、あまり重要な問題とは認識されず、文化に関しては、豊かなアメリカの物質文明とその表面的な生活用式が、異国への憧れを膨らませていたにすぎないといえる。

我が国の英語教育の目標は、急激な国際社会の変化を反映し、第2次大戦後は大きく変化してきている。森住(1995)⁽³⁾ は、学習指導要領の変遷をたどり、この変化は、教科名が「外国語」となり、

「英語」が科目名になると共にドイツ語とフランス語が入ってきたこととも呼応するが、対象が「英語および英語国の人々」から「外国語及び外国の人々」へと移行したことを明らかにしている。これは、「英語国の英語」ではなく「国際語としての英語」教育を指向しているものと解釈される。但し、言語材料については、「現代の標準的な英語」としている。

1970年代に入るとHalliday, Hymes らのような言語の社会的側面の研究者や、Austin, Searle らを中心とする、言語と人間の関係や、言語使用の側面を扱う語用論の研究者による研究から、従来の言語能力の習得を主眼にする英語教育では、実際の対人コミュニケーションに対処できない面があることが明らかになってきた。それは、たとえば学習者が文法的に正しい文を生成することができても、それらの文が実際にはあまり使われないものであったり、また場面や状況にふさわしい使い方を知らないために、単純な意志疎通ですら出来ないことがあるというようなものであった。つまり、言語を使うには、その言語の文法能力だけを習得しても不十分であり、さらに適切さや文の機能など、多くの言語使用に関する能力を習得しなければならない、というものであった。これをうけ、英語教育の目標は、コミュニケーション能力を獲得させることへと変わってきた。

また、急速な近代諸科学の進歩を背景にした外国人との直接的な接触の機会の急激な増大もコミュニケーション能力獲得への志向をさらに強化した。ほんの四半世紀前には、国外に出た日本人の数は、あれこれとりまぜて、年間40万人でしかなかった。さらにその10年前では、わずか5万人でしかなかった。それが今では、日本人海外旅行者数は1,000万人を越え、また、訪日外国人数も360万人余りにのぼっている。このような人的交流の飛躍的拡大と、そのような場面で意志の疎通が思うようにいかないということに対する反省から、実際に外国人とコミュニケーションをする場合に役に立つような実用的な英語を習得させることを英語教育の目標とすべきである、という社会からの要請も強まっている。

4. 英語教育における文化の扱いの問題点

これまでに見たように、現在の日本の英語教育

は、欧米の進んだ科学知識や産業技術、政治・経済制度などの導入するために専門書を読んでそこから知識を吸収する道具としての英語の言語能力を獲得させることから、国際社会に貢献しうる国民として必要な実用的なコミュニケーションの道具となりうるような英語でのコミュニケーション能力を獲得させることへと目標を変えてきている。

明治のころから第2次大戦後ころまでの英語教育では、対象となる英語は、Inner Circleの英語、つまり、アングロサクソン民族の「民族語」としての英語であった。しかし、現在では、それは、「国際語」としての英語、つまり、同心円の一番外側の円の中に含まれる3つのグループ全ての共有財産としての英語である。

「民族語」としての英語と「国際語」としての英語と区別して考える時、「国際語」としての英語はどのような特徴を有するものか、小池(1986)からまとめてみたい。

小池(1986)は、Inner Circleのnative Englishを「民族語としての英語」と把える時、Expanding Circleを中心としては「国際語としての英語」があらわれる、としている⁽⁶⁾。そこでは、「国際語としての英語」の特徴として、つぎの7点をあげている。「国際語としての英語」は(1)民族英語とは性格を部分的に異にすると言えるなら、その言語の使用者は、communicableであるという条件内で、発音、文法、語い、discourseの多様な異形態の存在に寛容であると言えよう(2)国や民族社会間で、コミュニケーションを行うために自ら発展していくもので、英語をnative languageとする人々も含むが、主には、それ以外の人々の相互コミュニケーションのためにあり、言語とその文化との密着性が弱い(3)特定の民族社会、国民がもっているidentityを変えたり、無視したりするものではなく、純粋にコミュニケーションの道具に限られるもので、話者が持つidentityや文化はそのまま保持される(4)個人が実際に使う時には、話し手としては自分が使いやすい英語の発音、語い、表現形態を保持し、相手の英語にあわせることはあまり考えないが、聞き手の立場としては必然的にさまざまな発音、表現に遭遇し、それを理解しなければならない立場になる(5)cross-cultural communicationに注目する必要がある。つまり、英語の発音、文法、表現のほかに、異文化間コミュニケー

ションのstrategyを心得ておくほうが望ましい。これはかなり幅の広いものであって、たとえばproximity（対人接触の距離）、話者・聴者としての心理的安定・不安定、依頼や承諾、拒否の表現方法のちがい、母語が話者間で異なる場合の言語構造、ものの考え方、感じ方、論理の立て方、順序、年齢、家族社会、男女の性と言語表現、敬語、丁寧語の用い方などがある。できればこれらの多くの情報を収集しておく、国際語としての英語も利用価値が大きくなる。（6）コミュニケーションの手段としてはverbalな面ばかりではなく、non-verbalな面も連動して考えたい。人間の動作ばかりでなく実物、絵、写真、film等の利用も考える。勿論、画の構成、色彩の作り方、film構成、撮影の視点など民族にはそれぞれ特色があるが、そのような面にまで、communicationの視野を広げる、総合的コミュニケーションとして国際語としての英語を考えたい。（7）世界の人々の共通のコミュニケーションのための言語としての英語は、Inner Circleの民族語としての英語というよりも、Outer CircleやExpanding Circleに属する国々の人が使う、「国際語としての英語」である。これには、常に、分裂・拡散の危険が伴う。近代国家としての自信のついた人々が、母国語なまりの英語の発音をもってコミュニケーションしてみる結果、理解がうまく行かないということがおきる。すでに、Chinese American, Indian English, Black American, Chicano Americanなどの発音が理解しにくいという現象は避けられない問題となっている。加えて、各自の文化を反映させた語いや表現、意味の差がますます大きくなる。prescriptivismがある程度働かないとcommunicabilityが崩れる心配がある。そこで、広い立場から各国、各民族特有の示唆的特徴を削って核を残し、common coreを持ったneutralityの強い「国際語としての英語」を目指さなければならない。

これらの特徴には、大きく分けて、英語という言葉それ自体に関するものと、それを使用する人々の文化に裏打ちされた運用に関するものが含まれる。英語という言葉自体に関しては、本稿の範囲を超えるので取り上げないこととする。

7つの特徴に見られる、文化に裏打ちされた運用の方は、複雑な問題を含んでいる。「国際語としての英語」は、「人々の相互コミュニケーションのた

めにあり、言語とその文化との密着性が弱い」ものであり、『各民族特有の示唆的特徴を削って核を残し、common coreを持ったneutralityの強い「国際語としての英語」を目指さなければならない』のであるが、言語それ自体としてならば、そのようなものを定めることは不可能ではないだろう。しかし、運用となると、言語としては「国際語としての英語」であっても、それにさらに、使用者と相手という2つの要素が加わることにより、この3者の間の関係ということになる。

一方がOuter CircleやExpanding Circleに属する国々の人で、もう一方がInner Circleに属する人の場合は、どうなるであろうか。Inner Circleに属する人が自分の文化を一時的にでも放棄することは、それ以外によるべき文化が無いのであるから、ほぼ不可能であり、Inner Circleの民族語としての英語と結び付いた文化を前提としてコミュニケーションをするのではないだろうか。それならば、Outer CircleやExpanding Circleに属する国々の人にとっても、抵抗感は少ないのではないだろうか。たとえば、「頑張って」とtake it easyは、相手の好ましい行動を促すために、どちらも別れ際に、言われることの多い言い回しである。しかし、語句の文字通りの意味は、ほぼ、反対である。日本人の学生との別れ際によく「頑張ってください」と言われることがあるが、その学生が外国人の英語の先生に同じ気持ちを伝えたいときには何と云うだろうか。英会話の知識のある学生ならば、take it easyと言うのではないだろうか。その場合は、Inner Circleの民族語としての英語と結び付いた文化を前提としてコミュニケーションをしていることになる。

では、両方がOuter CircleやExpanding Circleに属する国々の人の場合はどうなるであろうか。両者がともに相手の文化についての十分な知識がある場合には、お互いが相手が理解しやすいようにという配慮をしてコミュニケーションをする場合もあるだろうし、また、双方が、自分の文化を一時的に放棄して、Inner Circleの民族語としての英語と結び付いた文化を前提としてコミュニケーションをすることもありうるだろう。たとえば、相手の文化がどのようなものかわからない場合に、別れ際にtake it easyと言い、相手も話し手の文化は分からずに、それをInner Circleの民族語

としての英語と結び付いた文化を前提として受け取る、ということは十分ありうることである。しかし、もっとも有りそうなのは、双方が自分の文化を基盤として感じ・考え、それを英語で表現する、というものである。この場合、言語が共通であるために、背景となる文化の違いが見えなくなることである。英語を話す人の文化を理解する、ということは、国際語としての英語の場合には、100カ国以上を対象とすることになるので、事実上不可能である。

問題はそれだけにとどまらない。文化というものの捕らえ方そのものが問題となる。地球規模の人的交流・情報のやり取りが、多量にしかも素早く行われる現代において、国や民族を典型的に示す文化というものがはたして存在すると言えるかどうか、ということである。

たとえば、日本文化の一つの側面について考えてみよう。日本のことわざに、「聞くは一時の恥、聞かぬは一生の恥」というのがあり、その意味するところは、三省堂「必携故事ことわざと慣用句辞典」によると、「知らないことは恥ずかしがらないで必ず聞きだせ」ということである。では、この文化は、知らないことは聞いてはっきりさせる行動様式を持つ文化ということができるだろうか、あるいは、逆に、知らないことを分からないままにしておく行動様式を持つ文化なので、その戒めの言葉としてこのことわざが存在している、と考えるべきなのであろうか。

ある高校用の検定教科書に、異文化交流を題材とする、Sailing for Friendshipという課がある。「青年の船」と呼ばれる船での体験をある日本人がまとめたものである。そこで筆者は2人の若者に出身国を聞き、モルジブ共和国であるという答えを得る。筆者はモルジブ共和国が一体どこにあるのか分からない。その時の記述はこうである。

I wanted to ask. But I didn't ask them. I thought it would be impolite.

これを読んでどう思うかを、1年生40人に聞いた結果は、そのとおりだと思つたと答えたもの14人、知らないことは聞くべきだと答えたもの17人であった。この例から分かるように、日本人だからということで、行動様式を1つに特徴づけることは不可能であらう。

国際語としての英語教育では、その使用者の文

化が千差万別であるために、単なる、Inner Circleに属する国々の人々の生活様式の紹介も、Outer CircleやExpanding Circleに属する国々の人々の生活様式の紹介もそれだけでは、コミュニケーションの障害を減少させようという目的には、さほど効果が期待できない。

5. むすびにかえて

国際語としての英語教育において文化の扱いはどうすべきであろうか。「国際語としての英語」を考える場合には、その存在理由であるコミュニケーションの道具という観点から考えることが必要である。「世界の中の日本人」を育成するためには、コミュニケーションの理論的枠組み及びその中で文化の果たしている役割を理解させ、文化の違いがコミュニケーションの障害となる場面を体験させ、さらに、その障害をいかにして乗り越えるかを模索させることが望まれる。ここでは、文化とは、単なる珍しい風習・生活様式として紹介されるのではなく、異文化間コミュニケーションにおける潜在的に障害物となりうるものとして扱われるのである。

注

(1) 「民族英語と国際英語」

鈴木 孝夫 英語展望 1989

(2) 比較文化への視角

加藤 秀俊 中央公論社 1968

(3) 「学習指導要領の変遷が意味すること」

小池 生夫 英語教育 1995
年7月 大修館

(4) Crystal, David.

"How Many Millions? The Statistics of English Today," English Today, Cambridge University Press

(5) Buchanan, E. A.

"The Social Microcosm of the Classroom", The CPSR Newsletter, Vol15, No1, Winter, 1997

(6) 「国際語としての英語の発達と

わが国の英語教育改革」
森住 衛 英語展望 No. 87
1986 ELEC

- (7) Axtell, Roger E.
Do's and Taboos of Using English
Around the World, John Wiley & Sons,
 Inc, 1995

参考文献

- E・サピア B・L・ウォーフ他著、池上 嘉彦訳、
『文化人類学と言語学』 1970、弘文堂
石井 敏、岡部朗一、久米昭元、
『異文化コミュニケーション』 有斐閣 1987
加藤秀俊
『比較文化への視角』 中央公論社、1968
小池生夫
「国際語としての英語の発達と
わが国の英語教育改革」『英語展望』
No.87 1986 ELEC
澤田昭夫・門脇厚司編
『日本人の国際化』 1990、日本経済新聞社
鈴木 孝夫
「民族英語と国際英語」『英語展望』 No. 92、1989
直塚玲子
『欧米人が沈黙するとき』 大修館1980
森住 衛
「学習指導要領の変遷が意味すること」
『英語教育』 1995年7月 大修館
Axtell, Roger E.
Do's and Taboos of Using
English Around the World,
John Wiley & Sons, Inc, 1995
Buchanan, E.A.
"The Social Microcosm of the Classroom",
The CPSR Newsletter,
Vol15, No1, Winter, 1997
Condon, John C.
Cultural Dimensions of Communication
[『異文化間コミュニケーション』
近藤千恵訳 サイマル 出版会1980]
Crystal, David.
"How Many Millions?
The Statistics of English Today,"
English Today, Cambridge University Press